

第2次世界大戦後のアジアの図書館研究交流史

～インド、韓国を軸とした瞥見～

志保田 務

まえおき

2016年、本誌コラム<カタログガーのメモ>に「アジアにおける図書館情報学研究交流への期待：NDC および KDC を素材とした研究交流のすすめ」という短文を孫誌銜・大手前前大学准教授と共著で投稿した（本誌 No.69: 2016.10）。そこで本稿では第2次世界大戦後（以下、「戦後」）のその源流を質し、“期待”と“すすめ”のあたりを記そうとするものである。

1. インドにおけるユネスコ国際セミナー：アジアの図書館員交流の源流

戦後初期の公共図書館の振興策を強く進めたのは UNESCO（1946年設立）である¹⁾。1949年に UNESCO Public Library Manifesto（ユネスコ公共図書館宣言）を出し、これを下敷きとしてユネスコ共同図書館事業を展開した。アジアにおいて最も早くそれに呼応したのがインドのデリー公共図書館である（1952年開館）。なお高知市民図書館が、1956年にこれに加盟し1968年に満了した。国内で唯一の例で高い評価を得た²⁾。これらに代表されるユネスコの活動は、アジアをはじめとする図書館界の戦後の復興、刷新に大きく貢献した。

1955年このデリー公共図書館を会場に、ユネスコ国際セミナーが開催された。12か国から46人の正式参加者を得て、10月6日～26日、3週間の長期研修を施し、デリーで実現した効果をアジア諸国に波及せしめようとした。ただし南北朝鮮、新生中国・台湾などは出席していない。日本からは、大阪府の出張命令を得た府立図書館天王寺分館長・南諭造（以下、「南」）唯一人が参加した。開会式には文部大臣など地元の人々約800人が参列した。また閉会式にはジャワハルラール・ネルー首相が臨席し30分に及ぶ演説をした。当該セミナーの詳細な報告を、出席者・南が「アジア図書館の火は燃える」の活気あるタイトルで『図書館雑誌』に3号にわたって掲載した³⁾。

このセミナーの集大成として、最終日に「アジア図書館協会連盟」の結成が仮りに合意された。日本図書館協会（以下、「JLA」）へのこの件の伝達役だった南は「1957年11月9日東京芝パーク・ホテルで発会式をあげるまでにこぎつけた」と続稿で記している⁴⁾。ただし同稿はこの“発会式”前、“こぎつけた”段階で記されており、会合結果を記したものでない。アジア規模の“協会連盟創立大会”ならば、大会合だったかと想定される。“図書館協会連

盟”であるから、日本の窓口は JLA である。だが同連盟のその後について JLA は簡単な記録さえ公表していない。関係の断片記事としては、『図書館ハンドブック』（JLA 編刊）の第 6 版（2005.5）巻末「年表，日本編（明治以降）」に「1957 年（昭和 32）11 月 9 日 アジア図書館協会連盟（AFLA）創立大会（東京）」との項目がある。この 1 行にのみ全アジア的な図書館協会連盟の創立大会（らしきもの）が東京で開催されたとの記録を見るにとどまる。

南は『図書館界』誌に「ユネスコ図書館セミナーの印象」との一文を投じている⁵⁾。だがこれは前記『図書館雑誌』に載せた報文と同程度のものである。さらに氏はこの『図書館界』誌上に、上記のセミナーで親交を得たデリー公共図書館の D. R. Kalia⁶⁾ および Frank M. Gardner⁷⁾ の論文を訳出している。後者はデリー公共図書館が UNESCO Pilot Library の最初の例となった経緯，背景などを記しており，同セミナーの成立事情を伝えて有益である。だがこの何れもアジア図書館協会連盟の設立やその後について何も伝えていない。なお同誌，第 8 巻 1 号にはこの南がインドで講演した英文の掲載があるが⁸⁾，セミナー用の予稿であり，連盟結成の合意に至る以前の論述である。

ところが，この関係の記録が貧困な JLA であるが，関係する情報と言える記事が『国立国会図書館三十年史』（1979 年）上に見られる⁹⁾。引用する。

昭和三十二年（1957）十一月，「インド・太平洋地域の出版物の国際交換及び書誌に関するセミナー」が東京で開催されたのとほとんど時を同じうして，日本図書館協会主催のアジア図書館協会連盟（AFLA）の設立総会が東京で開かれたことである。AFLA 誕生の直接のきっかけとなったのは昭和二十六年十月日本図書館協会創立六十周年に，当館において，金森館長及び協会代表とアジア五カ国代表との間に開かれた「アジア図書館懇談会」であった。AFLA は IFLA の行う地域活動とは別に，アジア地域の図書館協会が自主的に聯盟を結成し，それによってアジアの図書館活動の発展，水準の向上，協力の推進をめざすのが目的で，インド図書館協会長のランガナタン博士の提唱に端を発するものであった。代表派遣招請状は二三カ国に送られ，出席国は一ニカ国で，会長に金森館長，事務局長には日本図書館協会の有山崧が選ばれた。しかし不幸にしてこの聯盟はアジア全域の活動としては成長せず，立ち消えにおわってしまった。これはわが国の図書館界だけでなく，アジア図書館界の持っていた発展の不均衡，地域的拡がりが大きすぎることで，財政問題，政治問題といった様々のマイナス要因がはたらいたものとして，その後のアジア図書館界に反省と挫折感を残したものとして記憶される。

「しかし不幸にしてこの連盟は（中略）成長せず，立ち消えにおわってしまった」うえ「反省と挫折感を残した。」と厳しく指摘されている。なお同記事に「インド図書館協会長のランガナタン博士の提唱に端を発する」とあるのが興味深い。上記セミナーの実行時期にはスイスに去り，3 週間にも及ぶ本国での国際行事への参加がなかった彼が，このセミナーで合意された AFLA の設立とどのように関係しているのか，前後の曲折が不明である。

同図書館協会連盟の展開は停滞した。原因は JLA が当初の責任機関となった点にあると

思える。当時の JLA にその力はなかった。また同時期の日本でのユネスコ事業が、東京や南の在職した大阪（JLA 理事長は中村祐吉大阪府立図書館長）でなかった点に図書館協会連盟が発進の絶好機を失した一因があるかと思う。この事業の高知市での実行は、それ自体上述のように有意義であった。逆に言えばこの高知市の成功をアジア規模の交流会に活用できなかったかとの悔いを残す。

2. S. R. ランガナタン

上述のように、アジアの図書館員交流にあってインドは戦後の焦点となった。ところで、アジアの図書館情報学者として『図書館学の五法則』や『コロソ分類法』が強烈な印象を与える S. R. ランガナタン (Ranganathan) が有名である。彼は、数学の助教授から図書館関係上最初に籍をおいたマドラス大学で夏期講座を足場に図書館学校 (Graduate course) を設けた (1944 年)。次にデリー大学に移って図書館学部と同修士課程を開設した (1948 年)。1950 年代前半も同大学で教鞭をとっていたが¹⁰⁾、1955 年、自身の活動本拠をチュリッヒに移した。そのためか、自ら設立に奮闘したインド図書館協会軸の上記セミナー (1955 年 10 月) と微妙にすれ違っている。上記の『国立国会図書館三十年史』によると ランガナタンはその辺りの時期にインド図書館協会会長だったようである。同セミナー出席者の南は不審の念を示した¹¹⁾。1958 年秋スイスでの約 3 年間を終えランガナタンは西周りでインドに向かう。経由地の米国、カナダで国際会議や講演を重ねたのち、帰国途上日本に降り立ち、同年 12 月 13 日 (土) 大阪市立図書館 (天王寺公園内：当時) を訪ね、午後 2 時 30 分から「コロソ分類法の特質について」と題して講演した¹²⁾。その日偶然にも同館に月例研究会の会場を借室予約していた日本図書館研究会・整理技術研究グループ (当時) のメンバー (世話人：前畑典弘：当時) が合流して、聴衆は約 50 名と盛り上がった。

インドへ帰国後、彼は故郷に近いバンガロール市に居を構えた。そして 1961 年、10 万ルピー (1 ルピー=1.53 円：現在) を、彼の図書館関係事象の出発点マドラス大学の創立 100 周年記念に寄付し、“サラダ・ランガナタン図書館学寄金”を設けた。サラダは同氏夫人の名であり、この寄金の組織自体は彼の歿後も継続している。この賞の記念会第 3 回 (1976 年) には J. H. シェラが来演し、それが単行書『図書館学の社会的基盤』となったとされる¹³⁾。だが同訳書の原書の表示では *Sociological Foundations of Librarianship, by J. H. Shera; London, Asia Publishing House, 1970* とある。この時系列は、私には理解困難である¹⁴⁾。

1962 年 8 月 12 日の彼 71 歳の誕生日を記念して *Festschrift* (記念論集) が企画され、*Library Science Today* と題しデリーの Asia Publishing House から 1965 年に出版された。日本からも森耕一、加藤宗厚が投稿している¹⁵⁾。

1972 年 9 月 27 日、偉大な業績を残し S. R. ランガナタンは逝去。81 歳 1 か月だった。その他界は国際的に哀悼された¹⁶⁾。その後も上述のサラダ・ランガナタン図書館学寄金賞の記念会が断続的に開かれている。

ランガナタンの生誕125年を記念して、チェンナイにあるインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras, Chennai) を会場に平成2017年年10月23日 (月) ~ 25日 (水) の期間で「知識組織化・図書館・情報管理国際学会：ランガナタン再考」(International Conference on Knowledge Organization, Library and Information Management: Revisiting Ranganathan: SRR@125)が開催された¹⁷⁾。主催は、サラダ・ランガナタン図書館学基金(Sarada Ranganathan Endowment for Library Science)、インド工科大学マドラス校、インフォマティクス・インディア(Informatics India Ltd., Bangalore)、ランガナタン情報学センター(Ranganathan Centre for Information Studies, Chennai)の四者共催である。初日は、協賛のシンガポールに拠点を置く知識組織化国際協会、IKO (International Society for Knowledge Organization) 主催によるプレ・セミナーIKO2017がセットで開催された。インド人の参加者が多いなか、アメリカやイギリス、ドイツ、そしてシンガポールといった諸外国からの参加もあった。2日目から3日目にかけては三つのテクニカル・セッション、二つのパネルディスカッション (“Public Libraries – India Vision 2022” と “Academic and Research Libraries – India Vision 2022”), それにMemorial LectureとInteractive Sessionで構成され、総勢24名の登壇者がそれぞれ発表した。東北大学図書館員 (現在：盛岡大教員) の吉植庄栄が招待され、東北大学の図書館サービスの斬新化に関わって述べた¹⁸⁾。同会議はInternational Conference on Exploring the Horizons of Library and Information Sciences: From Libraries to Knowledge Hubsと称し2018年8月にも開催¹⁹⁾。プログラム委員に杉本重雄、韓国十進分類法第6版編集長Oh Dong-Geun (呉東根) らが名を連ねた。

3. インドを場とした韓国によるアジア図書館情報学活動の進行

ICDL (International Conference on Driven Librarianship : 第1回は2010年開催) の第2回大会がインド東海岸SRM大学で2015年6月11-13日開かれた、筆者らも参加した²⁰⁾。SRM大学は、チェンナイ広域圏にある。チェンナイの旧地名はマドラスである。ランガナタンがその名を残すマドラス大学図書館情報学部はSRM大学と同じベンガル海近くにある。この会合でLibrary and Information Science Society for Asia and the Pacific (LISS ASPAC : アジア環太平洋図書館情報学会) の結成の合意がされ、翌2016年14カ国があい寄って設立した²¹⁾。このLISS ASPACの会長は前出の呉東根 (以下「呉」) 啓明大学校教授であり、事務局はSRM大学図書館 (事務局長 : Dr. Rajendran) におかれた。この学会の日本国内組織としてLISS ASPAC Japanが2017年8月12日に立ち上げられ、その発会総会、記念講演、研究発表が持たれた²²⁾。翌2017年、LISS ASPAC (韓国支部) も加わって、国際会議 “From Information to Knowledge” が韓国釜山 (Busan) の東儀 (Dongueui) 大学校で開かれた。KLISS (Korean Library and Information Science Society) がマネージメントしたものである。その予稿集として *Proceedings of Korean Library and*

Information Science Society, 2017, No.2 が出された。そこでは、Keynote speech を志保田務が務め “A Study on the Policy for Library in Japan: Current Status and Prospect” と題し講演した。

2018年8月18-19日、タイ国の Sukhothai Thammathirat Open University (STOU) にて、”The 1st International Conference on Library and Information Science: From Open Library to Open Society” が開かれた²³⁾。Keynote speaker として、呉や日本の大城善盛元同志社大学教授が講演した。上記の LISS ASPAC など7団体が組織したものである。その後 LISS・ASPAC のメンバー国が小会議を持ち、LISS ASPAC を2018年中に I-LISS (International Library and Information Science Society) に組織替えすること(本部は引き続きインドの SRM 大学図書館に置かれる)とした。ASPAC (アジア太平洋) というには “オーストラリア、ニュージーランドなどからの加盟がない” との批判もあり²⁴⁾、一層、国際性を自覚しようとしたものであろう。確かに、この集まりは、米国、欧州などからの参加もあり、その名称に地域限定すべきものではなかろう。過大名称に終始すれば恥ずかしいが、国際路線でよいであろう。ストックに東アジアや中国に的をすえた研究集会もあるが²⁵⁾。

I-LISS の日本支部は既に走り出している²⁶⁾。投稿論者には英文、または英文抄録付きを要請している。その元組織 LISS ASPAC Japan では「オセアニア向け展開の可能性」との研究発表もある²⁷⁾。

なお韓国の図書館情報学会ではいち早く国際化が進んでおり呉は、論文、Developing and Maintaining a National Classification System, Experience from *Korean Decimal Classification* をドイツで刊行されている *Knowledge Organization* 39 (2012) no.2 に掲載している。さらに韓国内で自らが中心となって *Journal of Information Science Theory and Practice* を2013年から季刊で発行している²⁸⁾。呉は英語と経営学の M.D. の上に LIS の Dr. を有し、少壮ながら啓明大学校の図書館情報学大学院院長を務めたが、インドでランガナタンの研究を重ねるほか、現在はタイで客員教授を務めている。インドを磁場とした図書館情報学が韓国を旗手として邁進している。そうした国際会議では、“日本は経済大国なのに、なぜ図書館制度、その教育システムが貧弱なのか” との追求を多々受ける現状にある。まずは国際研究(会)参加から盛り上げるべきであろう。

注

- 1) 図書館用語辞典編集委員会『最新図書館用語大辞典』柏書房, 2004, p.549.
- 2) 渡辺進「果たして進歩は可能であった;ユネスコ共同図書館事業とその後の図書館」『図書館雑誌』53巻6号, 1959.6, p.194-195.
- 3) 南諭造「アジアに図書館の火が燃える:ユネスコ・セミナーに参加して」1-3.『図書館雑誌』50巻1-3号, 1956.1-3(1号:p.10-18, 2号:p.37-41, 3号:p.74-78)
- 4) 南諭造「アジアの友人たち:ユネスコ・セミナーの思い出」『図書館雑誌』51巻10号, 1957.10, p.468.
- 5) 南諭造「ユネスコ図書館セミナーの印象」『図書館界』7巻6号, 1955.3, p.206-209.
- 6) カリア, D. R.「デリー公共図書館とその奉仕活動」南諭造訳,『図書館界』8巻2号, 1956.4, p.58-59.
- 7) ガードナー, F. M.「デリー公共図書館計画」南諭造訳,『図書館界』8巻3/4号, 1956.8, p.61-84.
- 8) 南諭造「公共図書館の発達と今後の課題」《英文: Development of Libraries in Japan and the main problems to be solved》『図書館界』8巻1号, 1956.2, p.1-4. [1955年10月ユネスコ図書館セミナーで発表したもの]
- 9) 国立国会図書館『国立国会図書館三十年史』国立国会図書館, 1979.3, p.489.
- 10) ランガナタン, S.R.『図書館学の五法則』森耕一監訳, 日本図書館協会, 1981.9(解説) p.411-415.
森耕一「ランガナタン博士をしのぶ」『図書館界』24巻4号, 1973.3, p.276.
- 11) 南諭造, 前掲3),『図書館雑誌』50巻1号, 1956.1, p.13. 中見出し「ランガナタン失脚か」
- 12) 仙田正雄「ランガナタン博士歓迎記」『図書館界』10巻6号, 1959.2, p.174-176.
- 13) シェラ, J. H.『図書館の社会学的基盤』藤野幸雄訳, 日本図書館協会, 1978.10, 185p.
- 14) 同上.
- 15) *Library Science today: Ranganathan Festschrift: vol.1: Papers contributed on the 71st Birthday of Dr. S. R. Ranganathan (12 August 1962)*, ed. By P. N. Kaula, Asia Publishing House, 832p. なお森耕一の投稿は『目録と分類の理論: 森耕一と整理技術論の発展』日本図書館研究会, 1993, p.69-78に収載もある目録論である。加藤宗厚論文も目録論。同文には現旧漢字圏で問題の著者の表示形に関する追究の基盤が見られる。
- 16) Palmer, B. L. Shiyali Ramamrita Ranganathan, Ayers 1892-1972, *Library Association Record*, (Obituaries), 74(11), 1972.11, p.228-229.
- 17) *International Conference on Knowledge Organization, Library and Information*

Management: Revisiting Ranganathan: SRR@125.

- 18) 吉植庄栄 「S.R.ランガナタンの足跡を辿って：生誕地から終焉の地までの図書館を中心に」『東北大学附属図書館調査研究室年報』5号, 2018.3, p.115-129.
<http://hdl.handle.net/10097/001224540saishuu> (最終確認：2018.10.26)
- 19) <https://drtc.isibang.ac.in/srr125/> (2019 最終確認 2018 年 8 月 7 日)
- 20) *Innovation Driven Librarianship: Creating Future Landscape for the New Generation Libraries and LIS Professionals.* SRM University,c2015.
<http://mysrm.srmuniv.ac.in/icidl2015/node/9> (最終確認 2018.10.27)
- 21) 志保田務「アジア太平洋の図書館情報学と日本」*Journal of LISSASPAC Japan*: 『アジア太平洋図書館情報学会日本支部誌』 vol.1, No.1, 2017.8, p.2.
- 22) 同上誌, p.3-27.
- 23) The 1st International Conference on Library and Information Science: “From library open to open society” : iCoo 2018, Thailan: Sukhothai Thammathirat Open University, 2018. 632p.
- 24) 前川和子 「LISSASPAC 日本支部設立会・記念講演会<報告>」『カレントアウェアネス』No.335, 2017.10.19. <http://current.ndl.go.jp/e1963> (最終確認 2018.10.27)
- 25) 「東アジア地域における書誌コントロールの動向と今後」(2016年1月9日)が好例の一つである。<http://josoken.digick.jp> (最終参照 2018年10月21日)。また日本図書館研究会は、21世紀初頭から「国際セミナー」を3年間に2回の割合で上海図書館学会との間で開かれている。
- 26) *Journal of I-LISS Japan: International Library and Information Science Society Japan Chapter, ISSN 2433-7870/*
- 27) 大城善盛「オセアニア向け展開の可能性」*Journal of LISSASPAC Japan*: 『アジア太平洋図書館情報学会日本支部誌』 vol.1, No.1, 2017.8, p5-13.
- 28) 略称：JISTaP eISSN:228-4577 pISSN:2287-9099

(しほた つとむ 桃山学院大学)

2018年10月27日受付

2018年11月8日受理